

計画概要

昨年基盤整備を実施した対象サイト1は、

- ・林地の水溜り等を利用して生き長らえてきた生物（残存ゾーンソース）が増殖する新たな生息地の創出
- ・増殖した生物が周辺域へ展開・拡散する源泉となるコアサイトとしての役割
- ・対象サイト3からの注目種の逸出に対するキャッチメント（セーフティネット）としての役割

といった位置付けでした。

今回基盤整備を実施する対象サイト2は、ここを挟んで位置するコアサイトとエコビレッジピオトープ間を水系ネットワークで連結するかけはしとしての役割を持っています。

コアサイトで増殖した生物が本サイト・エコビレッジピオトープにまで展開・拡散するようになり、エコビレッジピオトープに生息する生物には林地まで到達可能なルートを提供できるようになります。

コアサイトから本サイト・エコビレッジピオトープまでがつながることで、これらが一体化し、少し規模の大きな自然保護区が形成されることとなります。



基盤整備

設計上のポイントとして、乾燥しやすいことを考慮して、水を確保することと、その

水圧で畦が決壊する可能性が高まることに留意しています。



一般的な田より深く、水深20~30cmで水を溜めます。さらに、対象サイト1との境界の南側畦畔沿いを掘り下げ、対象サイト1からの用水(⑤)と染み出し水を溜めておく深水域(①・水深30~40cm)を造ります。降水量が不足する時でも干上がらず、生物が避難できる場所を確保するためです。

水を溜めることで、北側(下流側)の畦畔は水圧で決壊しやすくなります。これを防ぐため、アーチ状に拡幅補強します(②)。

排水口(⑥)へ向けて下がる勾配があるため、用水は水は真っ直ぐ排水口へ流れる傾向にあります。このため、所々パッチ状に植生域(③・④)を配置し、新鮮な水が全体に行き渡るよう誘導します。植生域は、水の苦手な昆虫や実は泳ぎが上手でないカエルにとって休憩の場にもなります。

③にはコナギ等の低茎草本を、④にはガマやサンカクイ等の高茎草本を移植し、日照条件を変えることで水温分布に多様性ができるようになります。

生物一時退避

当基金では、フィールドワークを実施する際には、対象サイト・エリアに生息する生物を予め一時退避し、フィールドワーク終了後に元の生息域へ復帰するようにしています。

今回は、深水域掘削エリアを中心に一時退避を行いました。確認された主な生物種は下記のとおりです。

- サンカクイ (広範囲) ・コナギ (パッチ状) ・イグサ (少) ・シャジクモ (少)
- ニホンアカガエル ・ドジョウ (多) ・ギンヤンマ (幼生) ・トンボ属 (幼生)
- アカハライモリ (多) ・ヒメゲンゴロウ or オオヒメゲンゴロウ ・マツモムシ

